
マリオネット

霜月 あかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マリオネット

【Nコード】

N8013M

【作者名】

霜月 あかり

【あらすじ】

空っぽな人形・・・その子に手を差し出してくれたものは・・・。

マリオネット

暗い湿った所。周りはガラクタなどで散らかっている所。ネズミや虫が這い出てくる所。そこはゴミだらけ。私はそこで固いコンクリの地面に寝転がっている。人は皆嫌がってこんな所にはこないけれど、私には何も感じない。わからない。全てをありのままに受け止める。

私には「心」がない。空っぽだ……。着ている服は埃まみれでボロボロだ。髪もグシャグシャでこんがらがっている。ここに居る理由は分かっている。

最初の私は箱に入れられていた。服もピンク色のフリルをふんだんに使った可愛い。髪も金髪で丁寧に整えてありリボンが飾られた。箱の中は綿で心地よい。箱は丁寧に包装されていてどこかに運ばれていく。

運ばれたところは豪華なお屋敷。その娘のお誕生日だった。私はその娘の父からのプレゼント。女の子は嬉しそうに丁寧にこの包装を取り、ふたを開ける。そして私を見るなりにすぐ手にとって喜んでくれた。そしてお父さんに「ありがとう！」とお礼をいって私を眺める。

女の子は私をとてとても大事にしてくれた。服を着せ替えてみたり、髪型を変えてみたり、一緒にベッドで寝たり。お出かけのときもいつも一緒だった。とても楽しい日々だった。空っぽの今と違いいろんなものに満ち溢れた。

けれど、そんな楽しい日々もすぐに終わった……。

女の子はある時に私とは違うモノに心を奪われてしまった。そし

て私を置いてそのモノの方へと行ってしまった。私は置いてきぼり。服や髪などがドンドンと汚く、乱れていき埃まみれのガラクタへと変わっていった。

そして気づいたらここにいます。もうどのくらいの時がたったのだろう。もう忘れるほどの時がたった。あの娘と過ごした日々の記憶が崩れ落ちていく。いつになったら終わりが来るのだろう。はやく・はやく終わりにさせて。

すると不意に私は持ち上げられていた。気づいて見てみるとそれはとても優しそうなおじいさん。最初はその辺にうろついているホームレスという人間だと思った。ホームレスやゴミ漁りは私をたまに手に取ると食べ物ではないとがっかりし八つ当たりするように私を投げ捨てる。その時、硬いコンクリートの地面に叩きつけられるのだが私は空っぽ。なにも痛みなんて感じない。ただ、服が汚れていくだけ。このおじいさんもきっと私を捨てるのだろう。そして終わりをまた待つのだろうと考えた。

しかし、考えなんてものは大ハズレ。私は軟らかいものに包まれたかと思うとどこかにしまわれる。何がおきたのか分からなかった。しばらく待って思い立ったのは終わりが迎えに来たのこと。きっとあのおじいさんはゴミなどを処分する人なのだ。これでやっと私も解放される。やっと何も考えず終われるのだ。そしてガタゴトとゆれながら私は運ばれる。終わりに向かって。

けれどまたもや大ハズレ。ついたところは暖かくて優しい所。袋から出された瞬間、光がまぶしかった。私でも感じられた。一体このおじいさんは何をするつもりなのだろう。するとおじいさんはちよつと失礼などと言って私に目隠しをした。目の前が真っ暗になる。もう考えることができない。まわりで物音がする。私の身体がいじられていく。なにかに変わっていく。気が遠くなっていく……。

どれくらいの時がたったのだろう。私はまだ目隠しをされている。カチャカチャと周りの音が途絶えない。でも感覚というものだろうか？なにか不思議な感じがする。なんだろう。ふと疑問を持ったとき。

「よし、できたぞ。」

おじさんの声が聞こえて、周りの物音も途絶える。なにが出来上がったというのだろう。そしたら目隠しがはずされた。

光が差し込んでまぶしい。目を閉じられずにいると身体がういた。おじいさんかと思うと、おじいさんは全く私に触っていない。勝手に動くことができないはずの身体が立つ。何が起きたか分からない。しかしなれない感覚が私の身体を動かした。くるくる回って踊るように。よく見ると私の服も変わっていた。あのボロボロだったはずの服がピンクを基調としリボンとフリルをふんだんに使った可愛いらしいドレスに変わっていた。それはくるくる回るとフワリとなびき私を飾りつける。

「あはは。可愛いらしいお姫様の誕生だ。」

気づくとおじいさんは嬉しそうに笑って手を動かしている。一体何をいじっているのだろう。辺りを見渡すと私の体の節々に透明な細い糸が巻かれて上に続いているのがわかる。どうやらおじいさんはこの糸をうごかして私を動かしているようだ。どこかで見たことある光景。たしか私のようなものは……。

ーマリオネット

その響きがおじいさんの口から聞こえた。そうか、私はただの人形ではなくマリオネットになったのか。おじいさんは人形師なんだ。私はくるくると回りながら考える。私でさえまだ輝いていけるんだと。それがとても嬉しかった。これから私はこのおじいさんの手で踊り輝いていくのだ。

！。そのとき空っぽな私を暖かくて優しいものが満たしてくれた・・・

（後書き）

初めての投稿です。分かりますと思いますが「マリオネット」は「操り人形」です。

この小説はふとゴミ捨て場に捨てられていた大きな人形をみて書き出してみました。あまり知識がないため人形から操り人形になれるものかわからなかったのですが、人形が幸せになるのにはどうなるか考えて造った道です。これを読んでなにを感じるのかそれは個人の自由です。

ぜひ、ご感想をお聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8013m/>

マリオネット

2010年11月13日23時19分発行